2018年度版

『過去の災害』から学ぼう！『人々の思い』

伝えよう
佐賀の災害歴史遺産
（さいがいれきしいさん）

佐賀県
http://www.pref.saga.lg.jp/

『過去の災害』から学ぼう！『人々の思い』

伝えよう 佐賀の災害歴史遺産

はじめに

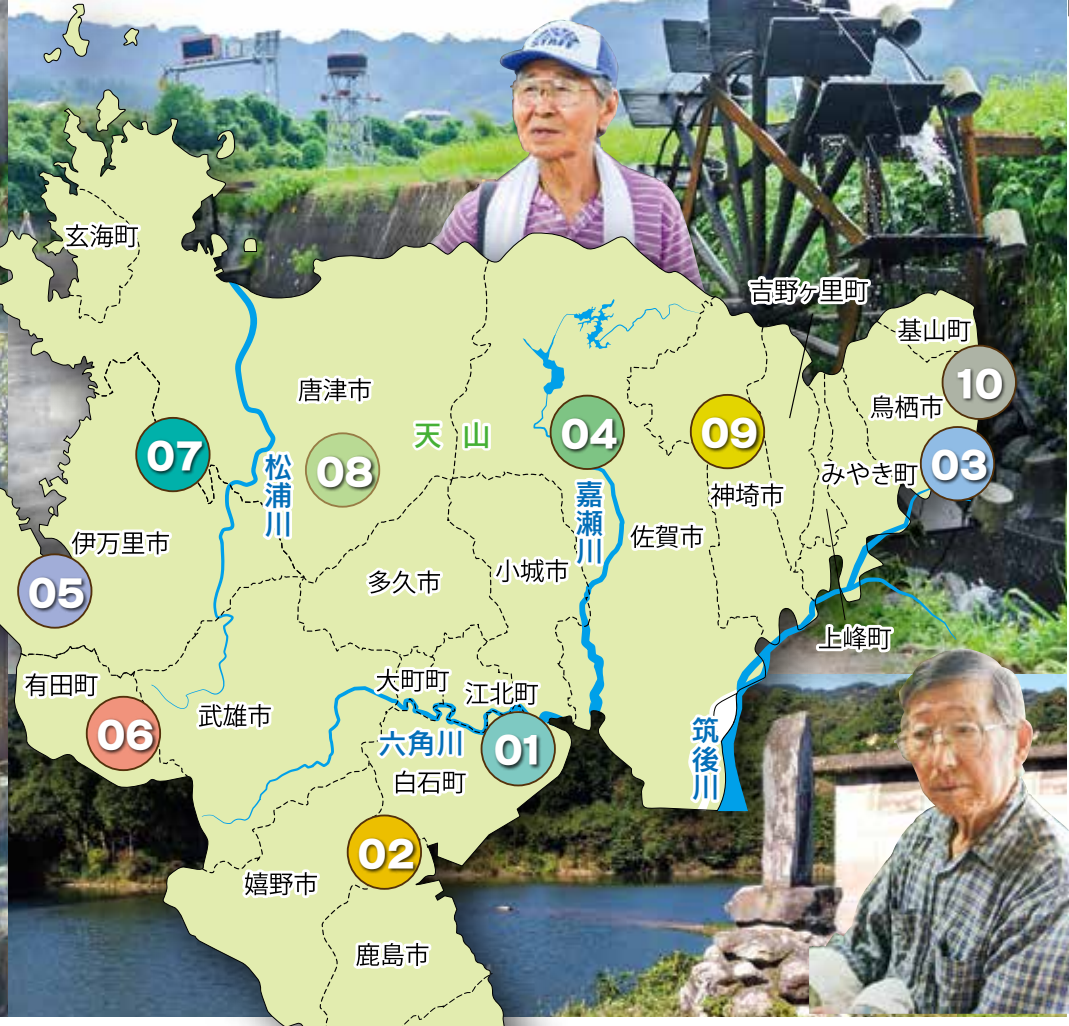
有明海と玄海灘に面し、緩やかな山々に囲まれた佐賀県。私たちのふるさとは、美しく豊かな自然にあふれる一方で、昔から川の氾濫や浸水、土砂崩れなどの災害に襲われてきました。

昔の人たちは大きな災害にあうたびに、その恐ろしさと教訓を忘れないために石碑を建てたり、建物などに被害が大きくならないような工夫をしてきたのです。また、地域のお祭りや行事の中には、災害を乗り越え、みんなで助け合う気持ちを持ち続けようという思いから始まったものもあります。こうしたものを佐賀県では「災害歴史遺産」と呼び、この冊子では、その中から10の遺産を紹介しています。

災害は突然やってきます。だからこそ、昔の人たちが私たちに残してくれた教訓や知恵を知っておくことは、あなたと家族や友達の命を守る助けになります。

その時のために、今、どのような「災害への備え」をすべきか考え、周囲の人たちとも話し合うことが大切です。

そして、これまで受け継がれてきた「災害歴史遺産」を、今度は私たちが、どのようにして未来の人たちに伝えていくのか、しっかり考えてみましょう。



目　次

01 潮塞観音（白石町）【自助の力】…… 3

02 鹿島おどり（鹿島市）【共助の力】…… 5

03 水屋と揚げ舟（鳥栖市）【先人の知恵】…… 7

04 昭和20年と24年の水害（佐賀市）【災害の伝承】…… 9

05 有田川の大洪水（伊万里市）【災害の伝承】…… 11

06 松本家住宅（有田町）【災害にそなえた家づくりと共助】…… 13

07 住吉天神社（伊万里市）【災害の伝承】…… 15

08 町切の治水施設（唐津市）【先人の知恵】…… 17

09 天神尾溜池の石碑（神埼市）【災害の伝承】…… 19

10 菅原神社（鳥栖市）【災害の伝承】…… 21

過去に佐賀県で起きた大きな災害
- 大雨 …… 23
- 台風 …… 25
- 地震 …… 26
- 高潮 …… 26

01

水害からまちを守る観音さまの伝説

潮塞観音

テーマ 自助の力

白石町
福富

上：福富地区には干拓による農地が広がっています
下：国道沿いに建てられているお堂

起きた災害

高潮がまちをおそう

有明海に近い白石町は昔から、海を堤防などで仕切って海水を抜き、農地などにする干拓が進められてきました。そのため低い平野が広がっていて、台風や高潮がくるたびに災害が起こりやすい場所でした。台風などの低気圧によって海面が高くもり上がることを「高潮」といいます。もり上がった海面が強い風におされると、陸地にまで海水がおしよせ、大きな災害になることがあります。そんな白石町の福富地区に、災害にまつわる不思議な伝説が残っています。

お堂の中に「潮塞観音」がまつられています

潮塞観音がもともと見つかった場所に大正５年に建てられた祠

かつての堤防あと
今は住宅地ですが、以前はここまでが海岸でした

エピソード

観音さまが助けてくれた！

1914（大正３）年８月25日、台風がおそってきた時のことです。強い風にあおられた高潮が堤防を何か所もこわし、町の中におしよせてきました。多くの若者や消防団が出動して、堤防を修理して高潮を防ごうとしますが、自然の力には勝てず、あたり一面は海のように水びたしになりました。

そして、いよいよ一番大事な堤防である「五千間土居」がくずれようとした時、どこからともなく小屋が流れてきて、こわれかけた堤防をふさぎました。それから、すーっと海水が引いていったのだそうです。

やがて台風はおさまり、堤防をふさいだ小屋の中をのぞいてみると「千手観音」が出てきました。これを見つけた人たちは「観音さまが千本の手を使って高潮を止めてくれた！おかげで大災害にならなくてすんだ！」とよろこび、心から感謝しました。それから人々は、流れついた観音像に「潮塞観音」と名前をつけて、土地の守り神にしたそうです。

今でも潮塞観音は国道444号のそばの目立つ場所にあります。福富地区の人たちは潮塞観音をまつるお堂を建て、その伝説を記した看板も作りました。また、毎年８月25日には「潮塞観音祭り」も行い、観音さまの伝説をお年寄りから子どもたちへ伝えているそうです。

溝上光一さん
「潮塞観音100周年記念祭」の実行委員長として、地域に潮塞観音の歴史を伝える活動をされています

「自助」の大切さを学ぶ

1914（大正３）年の高潮から100年以上がすぎました。今では有明海の海岸には強くてじょうぶな堤防がつくられ、白石町に高潮の被害はほとんどありません。それでも福富地区の人たちは台風が近づいてくると、風が強くなる前に、自分から先に立って避難所に行くそうです。

災害が起きた時には「三助」が必要だと言われています。自分や家族を自ら守る「自助」、近所の人と助け合う「共助」、自衛隊などの公的機関が行う「公助」のことです。この中でまず一番に大切なのは「自助」です。

福富地区の人たちは、昔の災害の経験から「災害はいつ、どんな形で起こるかわからない」ということを学びました。だからこそ日ごろから「自助」を心がけ、早め早めに対策・行動しているのです。そして、災害のおそろしさや教訓を伝えるために、潮塞観音の伝説を今でも大切に守り続けています。

02

復興のシンボルとなった夏祭り

鹿島おどり

テーマ 共助の力　鹿島市

現在の「鹿島おどり」の様子

起きた災害

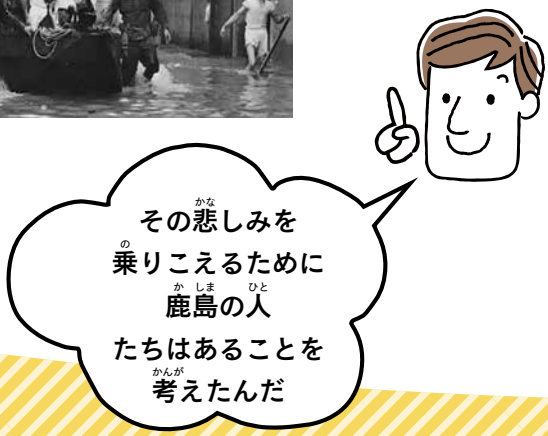
鹿島をおそったおそろしい水害

鹿島市は「ガタリンピック」など有名なまちおこしイベントがあります。しかし、もう一つ、忘れてはならない大事なお祭りがあります。毎年８月に行われる「鹿島おどり」です。鹿島おどりは1963（昭和38）年に始まり、50年以上も続いています。今はお盆の前の２日間に行われ、3000人以上の市民が参加し、約2万5000人のお客さんが見にくるそうです。

とてもにぎやかな鹿島おどりですが、始まったキッカケは1962（昭和37）年７月８日に鹿島をおそったおそろしい大水害でした。鹿島市は塩田川と中川にはさまれていて、大雨が降るとたびたび洪水が起こりました。この時も梅雨の大雨で川の水があふれ出て、家が流されたり泥水につかったりして、５人の死者が出ました。この水害のせいで、それぞれの地区で行われていた夏祭りも中止になり、鹿島の人たちはすっかり元気をなくしてしまいました。

自衛隊による救出活動がおこなわれました
（写真：鹿島市提供）

水浸しとなった鹿島平野
（写真：鹿島市提供）



エピソード

まちに元気を取りもどそう！

そこで立ちあがったのが鹿島の若者たちです。「災害を乗りこえ、鹿島に元気を取りもどそう！」と、市民みんなの大きな夏祭りを行うことにしたのです。おおぜいの人たちがまちの中心部に集まり、「一声浮立」「鹿島小唄」など昔からある歌に合わせて、いっせいにおどり出しました。「ヤッサ、ヤッサ」という大きなかけ声もひびきわたり、今までにない盛り上がりようです。市民は鹿島おどりのおかげで元気を取りもどし、復興にむけた最初の一歩をふみ出したのです。

今では川の水量を調節する排水設備などができ、鹿島で水害はほとんどありません。水害を経験した人も、そのこわさを知る人もへりました。そこで鹿島おどりをする前に、神さまに祈る儀式も行うようにしました。市民がいつまでも水害のことを忘れず、安全で平和な社会を守ることを、地元の守り神にちかうためです。

まつりはにぎわい、鹿島に元気がとりもどされました

助け合う気持ちを大切にする

鹿島おどりには地区の人だけでなく、市役所や病院、会社ではたらく人たちのグループや、保育所や幼稚園の子どもたちも参加します。地区ごとに鹿島おどりの練習会もあって、お年寄りが子どもに歌やおどり方を教えています。みんながおたがいの顔や名前をおぼえて、協力しながら、鹿島おどりを成功させるためにがんばるのです。

このように、地域に住む人たちが助け合うことを「共助」と言います。もしも災害が起きた時、いち早くかけつけて、力になってくれるのは近所の人たちです。この共助の心があれば、近くのおじいちゃんおばあちゃんも、子どもたちも、お店の人も、消防団も、みんなで助け合い、乗りこえることができるでしょう。

03

災害に備える先人の知恵

水屋と揚げ舟

テーマ 先人の知恵　鳥栖市 水屋町

上：住宅の軒下には今も揚げ舟が残されています
下：中央の水屋町の左を大木川、右を宝満川が流れています

起きた災害

筑後川の恵みと災害

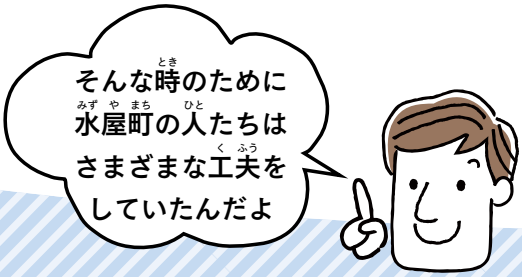
筑後川は、熊本・大分・福岡・佐賀の４つの県を流れる九州最大の川です。筑後川のおかげで佐賀平野や筑後平野がうるおされ、たくさんの作物を収穫することができます。その反面、ひとたび大雨が降ると“暴れ川”になり、多くの災害を起こしました。

鳥栖市にある水屋町も、昔は洪水被害がたえない地域でした。筑後川支流の宝満川と、大木川、秋光川に囲まれ、大雨が降ると四方八方から水が流れこんできたからです。

佐賀県で一番大きな災害といわれる1953（昭和28）年の大水害の時も、筑後川をはじめとする多くの川があふれました。すると水屋町の全体が水につかり、神社の鳥居まで水没してしまいました。水屋町のお年寄りに話を聞くと、この水害の時は１階の天井がつかるくらい水かさが上がり、まるで海のような光景になったそうです。ある人は２階で助けを待ち続け、またある人は３日間も小屋の中ですごしたそうです。１週間たっても水は引かず、道路も通れなかったので、助かった人たちが舟に乗ってそれぞれの家を回り、にぎり飯や飲み物をとどけたということです。

このときの水害では、水屋天満宮の鳥居が水没するほどでした

水屋町の集落では、洪水に備えて、石垣により高くした家が並んでいます



エピソード

人の命と食料を工夫して守る

それほど洪水や浸水にあいやすい水屋町ですから、昔の人は知恵をしぼって、独特の水害対策を考え出しました。

家を建てる時は土台に石垣を積んで、道路より１～２ｍくらい高い所に建てました。このように家の土台を高めることを「屋地盛」と言います。家のそばには「水屋」という２階建ての小屋も建てました。１階は米やみそ、しょうゆなどを保管し、２階は洪水の時の避難場所に使ったそうです。

洪水になって水がたまってしまうと、道路が使えなくなります。そこで移動用の木の舟を作り、ふだんは物置の軒下につるしていたそうです。この舟のことを、大切なお米をぬらさないよう舟で揚げるので「揚げ舟」とよんだと言う人もいます。さらに、家の北側に木を何本か植えて、洪水で流されてきた木が家にぶつからないようにしました。この家を守る木のことを「屋敷林」と言います。

大石喜代美さん
昭和 28 年の水害を経験
「水には苦労もさせられたが、お米がとれるのも水のおかげ」と自然と共存してきたくらしをふりかえられました

屋地盛、水屋、揚げ舟、屋敷林は、水屋町の人たちが自ら考えて行った水害対策です。川の水があふれておしよせてきても、人の命と家、大切な食料、家畜を守ることができるように、さまざまな工夫をしたわけです。

ここにあった水屋は昭和 28 年の水害のあとに解体されましたが、家の近くに建てられていたことがわかります

水屋の石垣は洪水に備え高く築かれています

浸水への備えを考えよう

家の中や道路に水が入ってくることを「浸水」と言います。浸水してきた時に無理して外に出ると、危険がたくさんあります。足もとが見えにくいために溝に落ちたり、水に流されたり、危ない物を踏んだりするかもしれないからです。水屋町の人はきっと浸水のこわさを知っていたのでしょう。家の中で安全に助けを待つためにも、どう備えておけばいいのか、先人の知恵に学んで日ごろから考えておきたいものです。

子どもの頃に体験したおそろしい水害

昭和20年と24年の水害

テーマ 災害の伝承（口伝）

佐賀市 大和町 川上地区

左：二十菩薩碑
右：当時の様子を知るお年寄りに話を聞きました

起きた災害

台風がもたらした大水害

雨水をためておくダムも、洪水をふせぐ強い堤防もなかった時代。台風や大雨がくるたびに川の水があふれ出し、大きな水害を起こしていました。1945（昭和20）年の枕崎台風と、1949（昭和24）年のジュディス台風の時も、佐賀のあちらこちらで大洪水が発生しました。佐賀市を流れる大きな川、嘉瀬川の流域にある大和町川上地区でも田畑が泥水につかり、家が流され、多くの被害が出たそうです。昭和20年の水害では20人、昭和24年の水害では18人が犠牲になりました。それから「二十菩薩碑」という石碑が建てられ、今も災害のおそろしさを語りついでいます。

川上地区にはそれらの災害を今でもおぼえているお年寄りがたくさんいます。子どもの頃に体験した災害の話を紹介しましょう。

川上地区の水害当時の様子を撮影した写真が残っていました
水の勢いがとても強く、家をのみこんでしまいそうです

家の周りがほとんど水没してしまっていることがわかります

エピソード

おじいさんおばあさんが災害にあった日

「北山ダムができる前は、大雨が降るとよく田んぼや畑が水につかっていました。昭和２０年と２４年の台風の時も川から水があふれてきましたが、ここまで水かさが高くなるとは思っていませんでした。家の中に浸水する前に、１階にあった食料や着物を２階に上げ、牛と馬を安全な場所に避難させました」

「１階が水につかってしまうと、窓が開けられなくなり、家の外に出られませんでした。ですから天井に穴を開けて、そこから屋根の上にのぼって助けを待ちました。地盤の低い家の方から『助けてくんさーい』とさけぶ声が聞こえ、牛や馬もたくさん流されていました。助けを待つ間は飲み水がなく、流れてきた食料を拾って食べたりしました」

「昭和２４年の水害の時は小学３年生でした。夜の間に水かさが増してきたので、天井に避難しました。米や食料、たたみも高い所に上げました。『大雨が来たら、にぎり飯を作って上においておけ』と言われていたので、この日もごはんをたくさん炊きました。それから３日くらいは水が引かず、料理もできなかったので、にぎり飯があって助かりました」

「東平川の堤防がこわれた時、川の近くにある家が３軒流されました。その家に住んでいた１０人が、川のそばの大きな木につかまり、助けを待っていました。水の勢いが強かったので、その人たちは服をはぎとられ丸裸になっていました。１日中、木の上で助けを待っていたようです」

川上地区のお年寄りたちから、当時体験した水害の話を聞かせていただきました

災害の体験談に学ぼう

こうした災害の体験談から、私たちは多くのことを学ぶことができます。「高い所まで浸水したら、ドアや窓が開かなくなる」「ぬれてこまるものは家の高い所に上げておく」「飲み水や保存食の準備が必要」「川のそばは危険。早めに避難しよう」などと想像して、災害への備えに役立てることができるのです。

あなたもお年寄りと話す時、昔の災害の話もぜひ聞いてみましょう。そして、もし自分が災害にあった時はどうしたらいいのか、家族と話し合ってみましょう。

05

災害をありのままに記録したノート

有田川の大洪水

テーマ 災害の伝承（手記）

伊万里市 二里町

上：線路沿いに石碑が並ぶ。手前が八菩薩の碑
手前から３つ目が水天宮

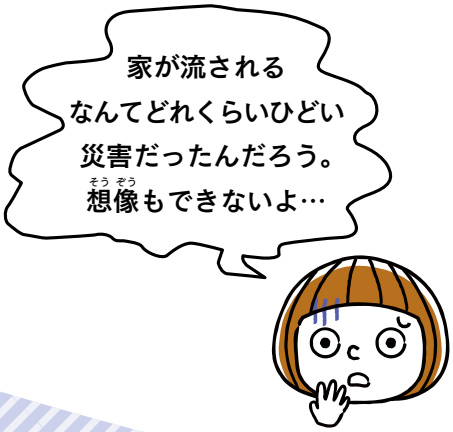
下：「金武神社 重要箱」と書かれた木箱
に記録が大切に保管されています

起きた災害

真夜中におそってきた大洪水

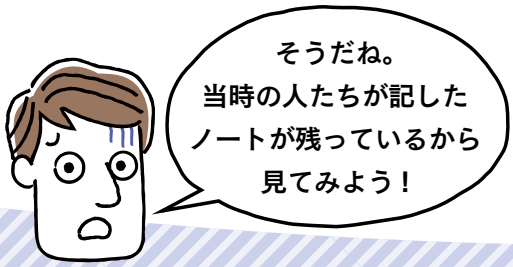
腰岳と国見山地という二つの山にはさまれた伊万里市の二里町。町の中央を有田川が流れていて、のどかな風景が広がっています。この有田川は二里町の生活用水や農業用水として欠かせない川でしたが、たびたび水害を起こす川でもありました。

1948（昭和23）年には大洪水がありました。9月10日から雨が降り続いて有田川が増水し、11日の夜、にごった川の水が一気に町の中におしよせてきたのです。真夜中になると、有田川の流域にある家が流され始めました。避難できなかった人は家とともに流され、二里町だけで12人の命がうばわれました。町の中は土砂や、建物がばらばらにこわれた瓦れきにおおわれ、橋もほとんど流されてしまったそうです。



金武神社付近にある六地蔵塔
笠の高さ（1.5 メートル）
まで水がきたという

今は改修されていますが、
上流の大井手堰もこの洪
水により流されました



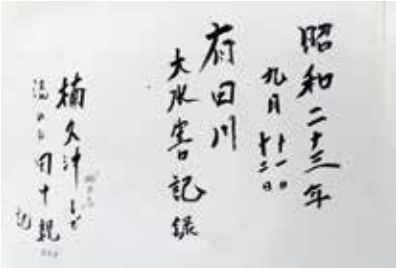
エピソード

水害の記録ノート

昭和２３年の有田川の大洪水の様子を、二里町の人が書き残した記録があります。

一つは、金武神社に古くからある『積立基金台帳』です。これは昔の人がお金の出入りなどを書きつけたノートのようなものです。そのなかに大洪水の記録もありました。「前夜から小雨が降り続き、夜７時から豪雨となり、午後９時４０分には有田川が増水して堤防をこえ、警鐘（危険を知らせる鐘）が打ちならされ、防水活動が始まった」と書かれています。さらに死者と流された家の数、お見舞いの金額、助けに来た人たちの人数まで、細かく書かれていました。

もう一つは、二里町の田中親さんという人が書いた『有田川大水害記録』です。田中さんは３０歳くらいの時に、この大洪水にあいました。一家４人が家ごと川に流され、伊万里湾の越木島に流れつき、奇跡的に助かったそうです。田中さんの記録によると「午前２時前に２階の天井あたりから水がビュービュー入り出した。そして２時になると同時に電灯が消え、ガチャンガチャンと大きな音がなり、家が倒壊した」とあります。洪水で家が流される瞬間の様子がありのままに書かれていて、おそろしさがじわじわと伝わってきます。



田中親さんが残した「有田川大水害記録」
当時の災害の様子を伝える貴重な資料です

災害を忘れないために

二里町には水害にまつわる石碑が、町のあちらこちらにあります。ＭＲ金武駅のそばにある「八菩薩の碑」「水天宮」は、昭和２３年の大洪水の犠牲者をなぐさめ、安全を祈るために建てられました。毎年夏には金武集落の子どもたちが中心になって「八菩薩さんの市」「水天宮さんの市」というお祭りを行っています。

今では有田川の改修工事が終わり、水害はほとんどありません。二里町の人たちにとって、有田川は自然豊かなふるさとのシンボルになっています。しかし、災害を起こす川のこわさを忘れてはならないという教訓ももち続けています。記録ノートや石碑、そしてお祭りを通して災害の歴史を伝え、もう二度と起こらないようにと祈っています。

おだやかに流れる有田川のそばに「有田川改修竣工記念碑」が建てられています

家づくりにこめた防災と助け合いの心

松本家住宅

テーマ 災害にそなえた家づくりと共助

有田町

有田に残る「松本家住宅」には、災害へのさまざまな備えがなされています

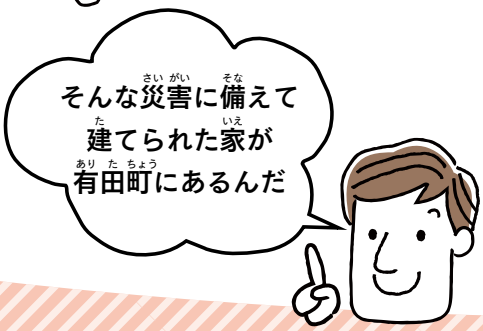
起きた災害

やきものの町を焼きつくした大火事

台風は強い風や大雨をもたらすだけでなく、時として火事のもとにもなります。最初は小さな火でも風にあおられれば、いきおいよく燃え始め、大きなほのおになることがあるからです。

やきもので有名な有田町では、江戸時代に町中を焼きつくす大火事がありました。1828（文政11）年9月16日、「子年の大風（シーボルト台風）」というとても大きな台風がきて、有田町にも強い風雨がおそいかかりました。そしてなんと、やきものを焼く窯の火をあおり、火事を出してしまったのです。その火は次から次へと建物に燃え移りました。ついに有田の町は跡形もないほど焼けおち、40～50人もの人が亡くなりました。この大火事は「有田の大火」とよばれ、有田町で一番おそろしい災害だったといわれています。

「永代帳（正司家文書）」（有田町歴史民俗資料館提供）には、大火事のすさまじさが詳しく記されています



エピソード

災害に備えた家

有田町の内山地区は、やきもの工場やお店がたくさん集まっている場所です。それらの建物のほとんどが、「有田の大火」のあとに建てられました。明治時代に活躍した商人、松本庄之助が建てた「松本家住宅」もそのひとつです。

基礎の高さが一目でわかります

この家は３階建てで、昔の蔵（倉庫）のような建物ですが、災害に備えた工夫がたくさんあります。たとえば、家の土台（基礎）は地上１m、地下１mと、とても高くつくられています。土台が高いと、洪水が起きても床の上まで浸水しにくくなるからです。壁には「漆喰（石灰にねん土などをねり合わせたもの）」が塗られています。漆喰は燃えにくいため、古くからお城や蔵の壁によく使われていました。また、火事になった時にほかの建物に燃え移らないように、家のまわりは庭や空き地にしたそうです。

家の横には空き地がひろがっています

さらに入口の土間や台所、お風呂はとても広くつくられました。災害が起きた時、住民が集まって、困っている人のためにお米を炊いたり、お風呂を貸したりするためです。

こまった時は助け合う

松本庄之助がこの家を建てる時、母おともから「災害に備えた家にしてほしい」とたのまれたそうです。なぜなら、おともは「有田の大火」のことを親やお年寄りから聞いて、そのこわさをよく知っていたからです。庄之助は母の言いつけを守りました。それから台風がきても家がこわれることはなく、今でも子孫が住み続けています。

庄之助は有田町に銀行をつくり、町の発展のために力をつくしました。そしてお金持ちだけでなく庶民や、困っている人たちの役に立ちたいと思っていました。そんな庄之助の努力もあり、有田町は世界でも有名なやきものの町になりました。

台風や大雨を人間の手で止めることはできません。しかし、被害を少しでも小さくする工夫はできます。日ごろから災害に備え、いざという時は助け合う「思いやりの心」が大切なのだと、この家が教えてくれます。

「安政6年松浦郡有田郷図」（佐賀県立図書館所蔵）
大火から 30 年後の復興した有田の町並みの様子が描かれています。

07

江戸時代から続く洪水の記録

住吉天神社

テーマ 災害の伝承（記録）

伊万里市
南波多町

上：歴史を感じさせるたたずまいの住吉天神社
下：平成 18 年大雨　水留地区の洪水の様子
写真提供：武雄河川事務所

起きた災害

水害が起こりやすい地形

伊万里市の南波多町水留地区は昔から洪水がよく起こる地域でした。水留地区は山にかこまれた盆地にあり、山から流れ落ちる水がここに集まってしまうからです。

さらに、地区の中を流れる波多川は曲がりくねり、川幅が急にせまくなる場所もあります。ですから、大雨が降ると川の水が流れきれずにあふれ出し、田んぼも水びたしになるのです。「水が留まる」ことから「水留」という地名になったとも言われています。

2006（平成18）年9月16日の大雨の時も、大水害が発生しました。一番高いところで2.9mも水位が上がり、国道は水につかって川のようになり、約80戸の家が床上浸水になったそうです。

平成18 年の大雨では、南波多町の府招地区で大規模な土砂災害が発生しました

神社の近くにある電柱にも、水位が記録されています

エピソード

神社に残された洪水の水位

この水留地区にはとてもめずらしい神社があります。住吉天神社という名前の、小さくて歴史のある神社です。神社のうしろには波多川が流れ、正面には田んぼが広がっていることから、この神社も昔からよく洪水で水につかっていました。そのため地元の人たちが神社の柱に水位の線をきざんで、記録してきたのです。

線で囲んだ場所には「安政四年」と記されています

一番高い所にある線を見ると、その横に「安政四年」と書かれています。これは江戸時代の終わりごろの1857年のことで、この時の水位が３m近く上がったことがわかります。それは神社の鳥居の上までつかってしまうくらいの高さです。

一番古いのは「寛保元年」と書かれた線で、江戸時代の中ごろの1741年にも洪水があったことを示しています。ほかにも「昭和２３年」や「平成２年」と書かれた線もあり、水留地区の洪水の歴史を知ることができます。

記録は未来へのメッセージ

だれが、何のために、神社の柱に線をきざんだのかはわかりません。ですが、水留地区は昔から洪水が多かったので、「大雨が降ったら、ここまで水がくることがあるから気をつけなさい」と伝えるために、昔の人が書き始めたのでしょう。住吉天神社は昔、お祭りや相撲などが行われ、人がよく集まる場所でした。柱の線を見るたびに、水留の人たちは洪水に注意するよう気持ちを引きしめたはずです。

それから現代になり、1996（平成8）年「南波多の昔を語る会」の人たちが、住吉天神社の鳥居のとなりに石碑を建てました。この石碑は丈夫な石でつくられ、神社の柱に残された水位の記録がそのまま書き写されています。もしも住吉天神社がほかの場所に移されたりしても、この石碑があれば大切な記録はずっと残るでしょう。

後世の人たちに伝えるため、水位の記録は石碑にしっかり刻みこまれています

災害の記録を残していくことは、自分たちの住むまちにどんな災害が起こるかを伝えていくことです。記録が未来の子どもたちを守ることにもつながるのです。

08

水の災害をふせぎ、水の恵みを利用する

町切の治水施設

テーマ 先人の知恵　唐津市 相知町

上：町切堰は厳木川の水を取りこむためにつくられました
下：現在も稼働している水車が見学できます

エピソード

水害をふせぐ先人の知恵

唐津を代表する大きな川といえば松浦川と厳木川です。この二つの川は相知町の中心部で合流し、１本の川になります。松浦川と厳木川が「会う地」だから、「相知」という地名になったとも言われています。しかしこれらの川は、昔からよく洪水を起こし、人の命や家、農地をうばってきました。そのため相知には、水害をふせぐための堤防やため池がつくられ、水害にまつわる石碑もたくさんあります。

なかでもめずらしいのが堤防です。ふつうの堤防は川の流れにそって、たて方向につくられます。しかし相知では、川とほぼ直角になるように横方向につくられた堤防が何カ所もあるのです。これを「横提」といいます。もし、ふつうの堤防がこわれても、横提で水の流れを受けとめることができます。横提のおかげで、下流にある集落や農地への被害を少なくすることができました。

写真奥の方に流れる松浦川に対し、横方向につくられた「横提」かなりの長さだとわかります

エピソード

水をうまく利用する

しかし、いくら水害が多いと言っても、生活や稲作をするうえで川は欠かせないものでした。そこで洪水をふせいだり、水の便をよくしたりする「治水」のための施設（建物などの設備）もつくられました。

考えたのは、江戸時代の唐津のお殿さまです。「川よりも一段高い所に田んぼをつくって、水害にあわないようにしよう」とひらめき、高い所にある田んぼに水を運ぶための方法を考えたのです。それは、①厳木川に「堰」をつくり、川の水を取りこむ ②取りこんだ水を「用水路」で集落に運ぶ ③用水路を流れてきた水を「水車」で田んぼに引き上げる――という方法です。そのおかげで、水害から田畑を守りながら、水をうまく利用することもでき、お米が安定して収穫できるようになりました。これらは町切地区にあるので、「町切堰」「町切用水」「町切水車」とよばれています。

石盛信行さん
「自然と暮らしを考える研究会」代表
相知の歴史を次世代につなぐために
さまざまな活動をされています

災害を乗りこえるために必要なのは？

厳木川が洪水を起こして町切堰がこわれると、村人たちが改修工事を行いました。町切堰のそばにある1885（明治18）年の石碑を見ると、「昨年7月の洪水で堰がこわれたので、相知の16の村の若者4000人が1カ月かけて修理した」と書かれています。町の安全と農作物を守るために、おおぜいの人たちが工事に参加したことがわかります。災害を乗りこえるためには、目標を決めて人々をまとめるリーダーと、みんなが助け合って努力することが必要なのです。

やがて時代が変わり、1955（昭和30）年ごろまでは町切地区の周辺に20基以上の水車がありましたが、年々へっていきました。1996（平成8）年にはわずか2基になったそうです。そこで地元の人たちは「自然と暮らしを考える研究会」をつくって水車の保存活動を始め、4基の水車をよみがえらせました。今でも田植えの時期になると水車を使い、田んぼに水を引き入れるそうです。また、環境の大切さを学ぶイベントなども行い、地域のシンボルとして水車を活用しています。

こうして、相知の人々が知恵をいかしながら災害を乗りこえた歴史を、広く伝えているのです。

町切堰の近くにある３つの改修記念碑
（左から明治18年、昭和19年、昭和43年）

08

災害の教訓を伝える石碑

天神尾溜池の石碑

テーマ 災害の伝承（石碑）　神埼市

上：「天神尾溜池」は今も地域の田畑にとってなくてはならない存在です
下：溜池の脇には「銘肝碑」と刻まれた石碑があります

起きた災害

ため池が決壊するこわさ

神埼町尾崎の山あいに「天神尾溜池」という名のため池があります。ため池とは、農業や防災のために雨水などをためておく池のことで、江戸時代に多く作られたそうです。佐賀県だけでも約2600カ所にため池があります。

天神尾溜池は農業用のため池です。水が必要な時期になると、山の上からすそ野にある田畑に水を送り出します。この周辺には大きな河川がなく、昔からたびたび「水不足」や、土がかわいて作物がかれる「干ばつ」が起きていました。天神尾溜池は農業をする上で欠かせない大切な水源なのです。

ところがこの天神尾溜池も大雨のためにこわれ、大きな水害が起きたことがあります。1947（昭和22）年6月21日から降り続いた雨のせいで、天神尾溜池に大量の雨水がたまりました。そして、ついに24日の朝8時ごろ、堤がくずれ落ちる「決壊」が起きてしまったのです。ため池からあふれ出た水や土砂は、一気に山を下って流れおち、田畑をうめつくし、農作物の植えつけができなくなりました。ため池につながっている岩田川の流域では、家屋が床上まで浸水し、小屋も流されてしまいました。

昭和22年6月25日 佐賀新聞
佐賀新聞社提供
天神尾溜池の決壊が新聞記事で伝えられています

エピソード

災害を肝にめいじる

やがて土砂にうまった田畑は少しずつもとの状態にもどりました。1969（昭和44）年には天神尾溜池の改修工事も終わり、石碑が建てられました。

「銘肝碑」の裏には
「天災は忘れた頃に来る」の文字がきざまれています

この石碑の表には「堤防決壊銘肝碑」、うら側には「昭和22年6月24日 天災は忘れた頃に来る」と書かれています。文字を書いたのは、地元の小学校で教えていた野田常三先生です。じつは野田先生の家も岩田川の近くにありました。昭和22年に天神尾溜池が決壊した時は、野田先生の奥さんが川に流されないよう、家の柱に必死でしがみついたそうです。

山口正俊さん
ため池が決壊した当時、山口さんが通っていた小学校の校長先生が野田先生でした
野田先生が「銘肝碑」の文字に込めた思いを語っていただきました

水害のおそろしさを思い知った野田先生は、「天災を肝に銘じる（深く心にきざみこんで忘れない）」という教訓を伝えるために、天神尾溜池の石碑に「銘肝碑」と名付けました。この石碑を見るたびに、地元の人たちはため池が決壊した時のことを思い出すでしょう。

未来に災害を伝える石碑

天神尾溜池の石碑のように、佐賀県には災害にまつわる石碑がたくさんあります。その場所で起こった災害を記録する石碑、災害の犠牲者をなぐさめる石碑、もう二度と災害が起きないように祈るための石碑、復旧工事が終わった記念に建てた石碑…などです。大きさも形も、建てられた年代もさまざまですが、昔の人はこわれにくい石に大切な情報をきざんで、未来の人たちに伝えようとしたのでしょう。

道路や川のわきで、または山の中で石碑を見かけたら、「昔の人たちは私たちに何を伝えようとしているんだろう？」と考えてみてください。その土地の歴史を物語る、大切なメッセージがかくされているかもしれません。

10

大地震により倒壊した神社の鳥居

菅原神社

テーマ 災害の伝承（鳥居）　鳥栖市

上：この鳥居のみが建立時の姿をのこしています
下：神社境内には地震で倒れた鳥居が保存されています

起きた災害

佐賀県でも震度６弱を記録

2005（平成17）年3月20日午前10時53分ごろ、「福岡県西方沖地震」が発生しました。マグニチュード7の強い地震で、1人が死亡、1200人以上が負傷、9000戸以上の家屋が損壊と、福岡市を中心に多くの被害が出ました。

佐賀県の鳥栖地方でも震度５強という強いゆれが記録されました。県内のほかの市町でも震度4～6が記録され、15人が重軽傷、130戸以上の家が損壊しました。

日本は地震の多い国です。1995（平成7）年の阪神・淡路大震災、2011（平成23）年の東日本大震災では、もとの姿がわからないほど、まちがこわれてしまい、多くの人が犠牲になりました。しかし、これまで佐賀や福岡では地震はあまりありませんでした。経験もない、予想もしない地震に、佐賀の多くの人がおどろき、不安になりました。

エピソード

助かったのは不幸中の幸い

地震の被害は思いがけないところにも現れました。それは神社にある鳥居です。多くの鳥居はがんじょうな石で作られていますが、地震の強いゆれにたえきれなかったのでしょう。福岡県西方沖地震では菅原神社（鳥栖市）と天神社（唐津市）の鳥居が倒れました。さらに2016（平成28）年の熊本地震では、愛宕神社（佐賀市）と新北神社（諸富町）の鳥居も倒れたそうです。

地震で倒壊した直後の鳥居
佐賀新聞社提供

福岡県西方沖地震が起きた時は、ちょうど日曜日のお昼前。天気もよく、いつもなら子どもたちが神社で遊んでいる時間です。子どもたちが倒れた鳥居の下じきにならなかったことは、不幸中の幸いだったと言えるでしょう。

菅原神社のある鳥栖市原町地区の人たちも、神社に当たり前のようにある鳥居が倒れてしまったことに、大きなショックを受けました。そこで住民たちで話し合い、倒れた鳥居をすべて集めて、境内で保存・公開することにしました。鳥居が倒れた理由や保存する目的をまとめた看板も作り、地震のこわさを伝えています。

鳥居のひび割れも当時のまま残っています

地震は突然起こるから…

じつは原町地区の周辺は昔から水害が多く、災害のおそろしさを知っている人がたくさんいます。そのため日ごろから災害に備え、防災訓練や避難訓練も毎年行っているそうです。だから菅原神社の鳥居が倒れた時も、保存して教訓にしようとしたのでしょう。

地震は突然起こります。どんなに科学が発達した時代でも、地震の予測はとてもむずかしいことです。ですから、もしも自分の住むまちで地震が起きてしまったら、「どこが危険なのか」を知っておくことはとても大事です。さらに「どこに避難すれば安全なのか」「どう家族と連絡を取り合うか」などをふだんから考え、家族や近所の人とも話し合っておきましょう。

過去に佐賀県で起きた大きな災害

大雨

佐賀県で発生する風水害のうち、その半分は大雨によるものです。6月～7月の梅雨の時期は大雨が降ることが1年で最も多く、8月～9月も台風や秋雨前線の影響で大雨がよく降ります。特に、長時間雨が降り続く中で短時間に集中した雨が降った場合は、大きな災害が起きる可能性があるので注意が必要です。

1953年《昭和28年》 6月25日～28日の大雨

県内の主な河川が次々と決壊し、各地で地すべりや土石流（土や石が雨水と一緒に斜面を一気に流れること）が発生しました。県の全域で被害が広がり、筑後川沿いの地域では、10日以上冠水（洪水により田畑などが水をかぶること）が続いた地域もありました。水害による被害額は1年間の県民所得の6割に到達するほどで、死者も62名にのぼりました。

昭和28年大雨　小城市（旧牛津町）
武雄河川事務所提供

昭和37年大雨　鹿島市
鹿島市提供

1962年《昭和37年》 7月7日～8日の大雨

太良山地に集中的に降った雨により、この地域では山崩れが341か所、流されたり、土砂に埋もれたりして全半壊した家は353戸にものぼりました。大浦地区を中心に62名の死者・行方不明者が出ました。

1963年《昭和38年》 6月30日の大雨

三瀬地区を中心に、山、がけ崩れが926か所、全半壊した家は181戸、15名の死者が出ました。

昭和55年大雨　牛津川流域　武雄河川事務所提供

1980年《昭和55年》 8月28日～31日の大雨

牛津川の堤防が決壊して、牛津町のほぼ全域が浸水により孤立するという事態が発生しました。その他にも、山崩れ、ため池決壊など県内の各地で大きな被害が発生し、死者は４名、床上浸水が3,006戸、床下浸水は16,965戸にのぼりました。

1990年《平成2年》 6月28日～7月3日の大雨

河川の堤防を越えた水が陸地に流れこむことにより、牛津町では町全体の８割が浸水し、県全体でも平野部の約半分が浸水しました。その他にも、県南部と中央部を中心に、山地での災害が多発し、死者は２名、床上浸水が4,635戸、床下浸水は21,113戸にのぼりました。

平成２年大雨　佐賀市

平成21年大雨　武雄市

2009年《平成21年》 7月24日～26日の大雨

県内の各地でとても激しい雨が降り、２４日から２６日までに降った雨量は、多くの地区で平均的な７月の１か月間の雨量を上回りました。死者は１名、床上浸水が８１戸、床下浸水は1,065戸にのぼりました。

2018年《平成30年》 7月5日～8日の大雨

数日前に九州に接近した台風第７号や梅雨前線の影響で九州の広い範囲で大雨が降りました。佐賀県でも嬉野市の雨量が観測史上１位を更新するなど激しい雨が降り、県内に初めて大雨特別警報が発表されました。死者２名、負傷者３名、土砂崩れや浸水などによる住宅の被害が発生しました。

平成30年大雨　唐津市（旧厳木町）

台風

佐賀県は地理的に昔から台風が近づくことが多い地域です。台風は平均(1981年～2010年)すると1年間に約26個発生していますが、佐賀県が位置する九州北部地方への接近を見てみると、9個も接近した年もあれば、1個も接近していない年もあるなど年によってばらつきがあります。台風が接近すると、大雨、暴風、高波、高潮などが発生し、佐賀県ではこれまでも大きな被害を受けてきました。

1945年《昭和20年》 9月17日（枕崎台風）

三瀬地区など脊振山地を中心に大雨が降り、佐賀、神埼、三養基、小城地方では河川の堤防がいたるところで決壊しました。死者・行方不明者は101名、倒壊した家屋は304戸というとても大きな被害が出ました。

1949年《昭和24年》 8月16日～18日（ジュディス台風）

この台風は佐賀県に接近するにつれて速度が遅くなっていったため、佐賀県では長い時間雨が降り続きました。この雨の影響により死者・行方不明者は佐賀、小城を中心に95名、家屋の被害は全壊234戸、半壊610戸というとても大きな被害が出ました。

平成３年台風　佐賀市
佐賀新聞社提供

1991年《平成3年》 9月13日～14日（台風第17号）

佐賀市で観測史上1位となる秒速５４.３メートルの最大瞬間風速を観測しました。この暴風の影響により、佐賀市と七山村で家の倒壊に巻き込まれ、2名が死亡、家屋の被害は、全壊9戸、半壊102戸、一部損壊110戸にのぼり、その他にも農業、商業への被害も多く発生しました。

1991年《平成3年》 9月27日（台風第19号）

台風第１７号の約２週間後に上陸し、佐賀市は観測史上２位となる秒速52.6メートルの最大瞬間風速を観測しました。連続して直撃した台風による影響は大きく、家屋の被害では、全壊23戸、半壊673戸、一部損壊34,208戸にのぼり、農業、商業など様々な被害をもたらしました。

2006年《平成18年》 9月16日～18日の台風（台風第13号）と秋雨前線豪雨

佐賀市で観測史上３位となる秒速50.３メートルの最大瞬間風速を観測し、県内各地で停電が発生し、生活に大きな影響を及ぼしました。また、秋雨前線の影響により非常に激しい雨が降り、唐津市や伊万里市で土砂災害が発生し、3名が犠牲となりました。農産物への被害も大きく、特に稲については、過去最悪の出来となりました。

平成18年台風　伊万里市

地震

2019（平成31）年までに佐賀県で発生した記録に残っている地震では、福岡県西方沖地震の発生のときに、県で初めて震度６弱を観測しました。また、熊本地震では、佐賀県で震度５強を観測し、県内に津波注意報が発表されました。

佐賀県内には、地震を引き起こす可能性がある活断層がいくつか存在しています。これらの活断層により地震が発生した場合、想定では佐賀県内で最大震度７の揺れとなると予測されています。

平成１７年福岡県西方沖地震
鳥栖市　佐賀新聞社提供

2005年《平成17年》 3月20日　福岡県西方沖地震

福岡県西方沖を震源とするマグニチュード７．０の地震が発生し、佐賀県ではみやき町で最大震度の震度６弱を記録しました。この地震により、県内では、重傷者１名、軽傷者14名、半壊１戸、一部損壊136戸の被害が出ました。

2016年《平成28年》 4月16日　熊本地震

４月１４日に発生した最大震度７の地震が起きた２日後、再び熊本地方を震源とするマグニチュード７．３の地震が発生し、熊本県益城町、西原村では震度７を記録しました。佐賀県では、佐賀市、神埼市、上峰町で震度５強を記録しました。この地震により、県内では、重傷者４名、軽傷者９名の被害が出ました。

高潮

佐賀県が面する有明海は、潮の満ち引きによる潮位（海面の高さ）の差がとても大きい海として有名です。この有明海の満潮（海面が最も高い）のときと台風の接近が重なると、気圧や風の影響により高潮が発生しやすくなります。有明海沿岸では、過去にも多くの高潮被害を受けてきました。

1956年《昭和31年》 8月17日　台風第9号

台風の最も風が強いときと有明海の満潮が重なったことで、有明海沿岸の干拓堤防がいたるところで決壊し、海水が陸地に流れ込んできました。この影響で、田畑は壊滅し、農作物にとても大きな被害が発生しました。また、一部の地域では、住宅が屋根付近まで水没するなど大きな災害となりました。

1985年《昭和60年》 8月31日　台風第13号

台風の佐賀県の通過と有明海の満潮が重なり高潮が発生しました。有明海とつながる15の河川で大波により堤防が崩壊し、久保田町では堤防の上の部分が２０ｍにわたって壊れ、海水が流れ込んできました。また、芦刈町では、漁船１５０隻が高波を受け、堤防や道路に打ち上げられました。床上浸水は２７９戸、床下浸水を含めると1,000戸以上の住宅が被害を受けました。

昭和60年高潮　小城市（旧芦刈町）
武雄河川事務所提供

パンフレットに関するお問い合わせ先は

佐賀県

佐賀県消防防災課

〒840-8570 佐賀市城内1丁目1-59

Tel:0952-25-7362

shouboubousai@pref.saga.lg.jp 防災・減災さが 検索

Copyright © 2019 Saga Prefecture. All Rights Reserved.

小学校　　年　　組

名　前